

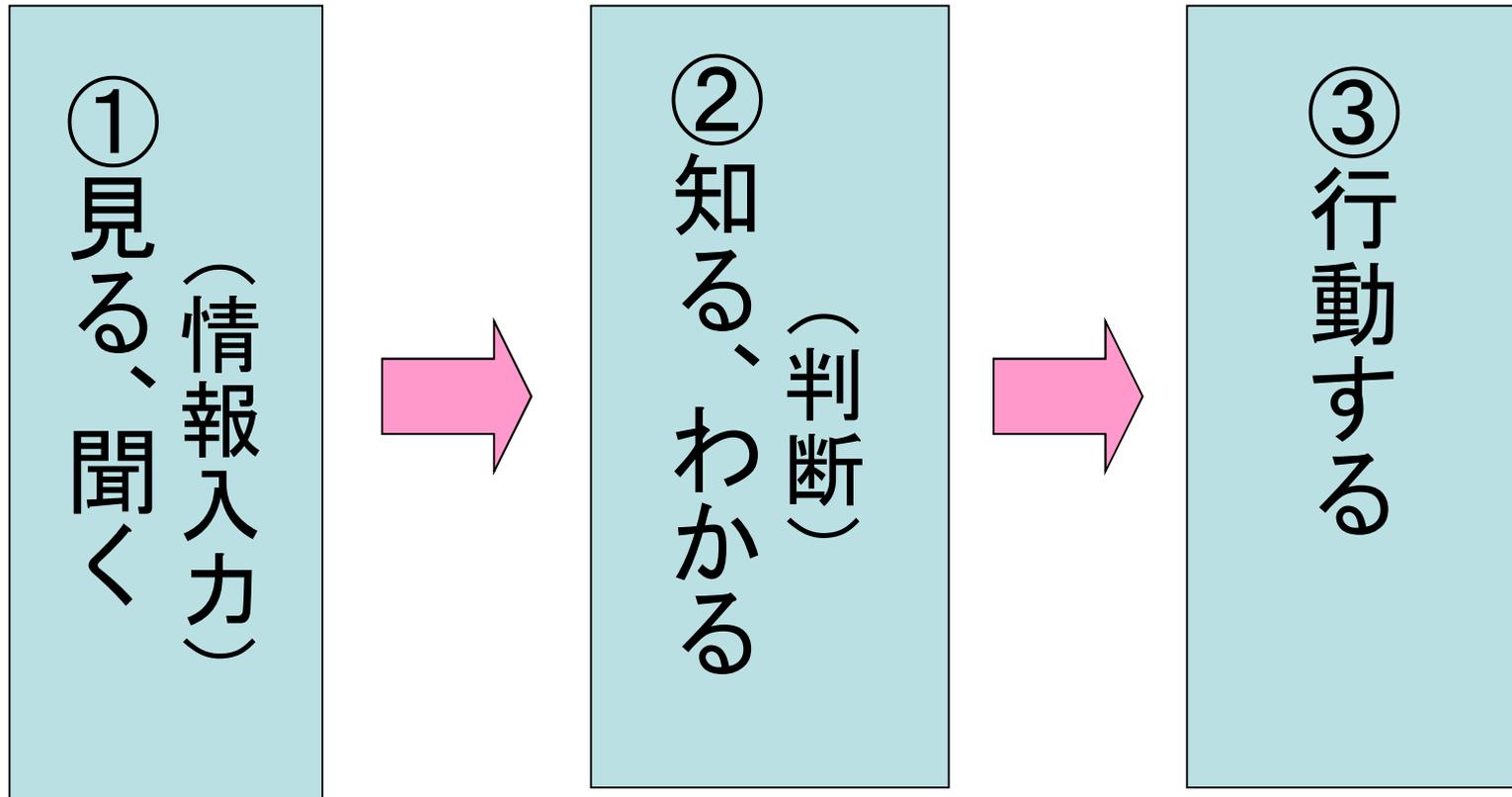
第4回 風疹に関する小委員会

普及啓発について

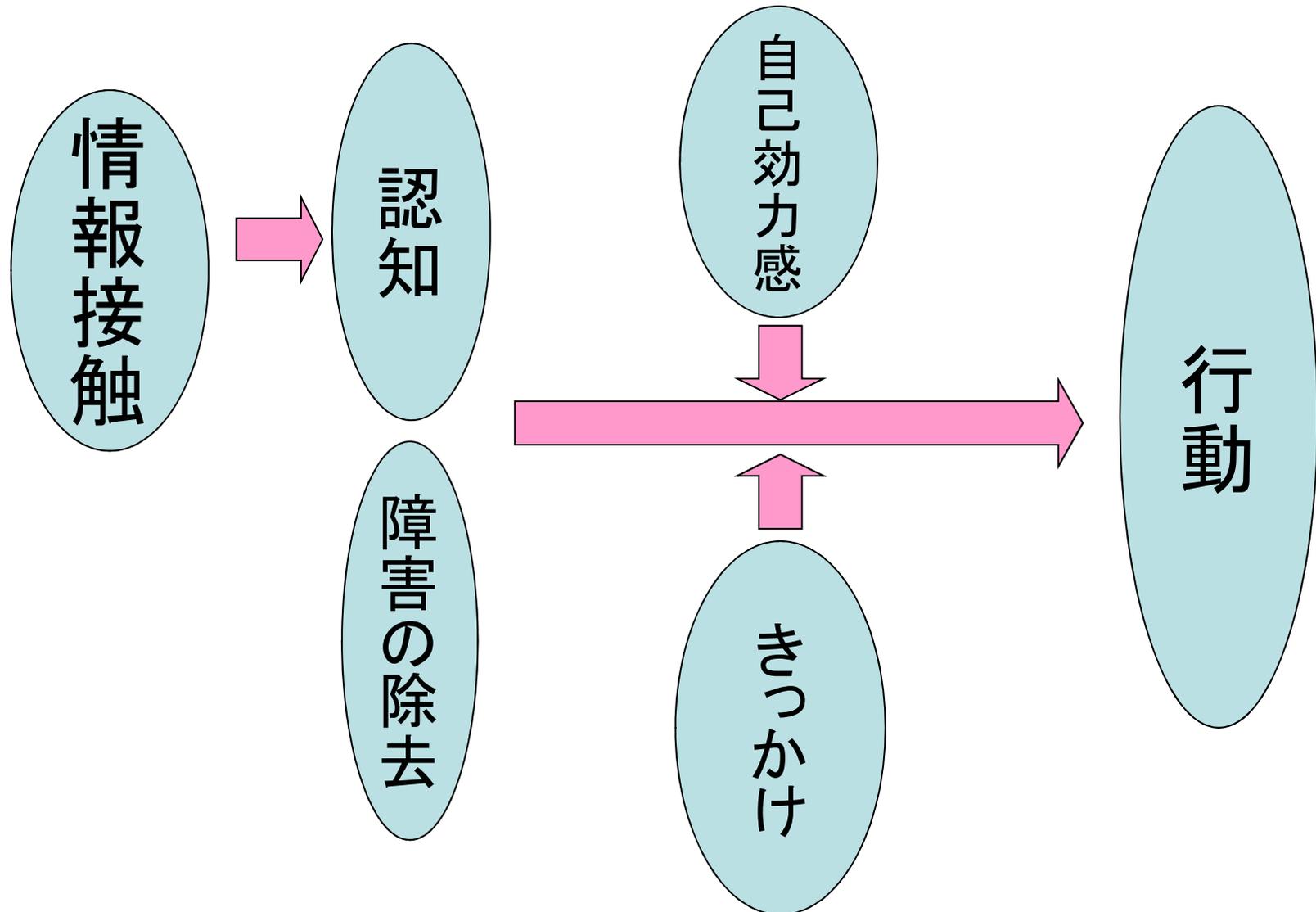
読売新聞医療部

館林牧子

# 普及啓発の目的



# 行動科学の考え方の例



キャンサースクランへの取材による

- 認知(情報の内容、提供の仕方)
- きっかけ
- 障害(お金、距離、時間)
- 疾患にかかる可能性
- 疾患の重大性
- 行動の利益
- 自己効力感(行動を取る自信)
  - ほめる、周りの人も行っている、昔行ったことがある等々
- 規範の形成

キャンサースクリーンへの取材による

# 「疾患の重大性」「行動の利益」が グループで異なる

- 産後の女性、不妊治療中の女性
- 妊娠中の女性
- 上記以外の妊娠、出産可能な年齢の女性
  
- 妊娠の可能性のある家族のいる男性
- 20-40歳代の男性
  
- 海外渡航者、医療従事者、教育関係者等＋その他  
→対象ごとに有効なメッセージの内容、伝達手段が異なる

# 医学的判断、政策的判断に基づいた普及啓発展開

- 目的は何か？ CRSの低減？風疹の排除？
- 目的遂行のためには、どういうグループに免疫をつけてもらうべきなのか？（集団免疫vs個別予防等の医学的根拠）
- 抗体検査、予防接種歴を組み入れるか
- 費用対効果、他の感染症対策との兼ね合い
- 費用低減の方策の有無（75cent vs 1万円）

何のために、誰に免疫をつけてもらうか。どこまで費用の助成をするか→決定した政策をどこまで有効に伝達できるか？

# グループ別のアプローチの例①

## <個別予防が必要な群>

- ・日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会等の協力で、出産後、不妊治療前、婦人科受診等の機会に接種を呼びかける。(女性の家族も含む)
- ・日頃医療機関を受診しない、妊娠可能な年齢の女性には、個別パンフレットの送付やクーポン券の送付など(女性の家族も含む)

## グループ別のアプローチの例②

集団免疫をつけてほしい群(20-40歳代男性を想定)

- ・情報提供の例→休職を避けられる。まれだが重症化も回避できる。インフルエンザは毎年打つ必要があるが、風疹は1回で済む+周囲の女性のためにもなる。
- ・職域では定期健診時の抗体検査、接種  
→障害の除去(時間、距離)、きっかけの提供
- ・障害の除去(費用)?

# グループ別のアプローチの例③

- 海外渡航者  
検疫所のワクチン情報サイトFORTHの国別項目で情報提供等
- 医療従事者、保育・教育関係者  
業種ごと、職能団体ごとの徹底？
- その他 大学入学時のチェック等？

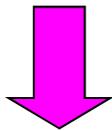
## グループ別のアプローチ例④

- 妊婦→妊婦健診でどう対応すべきか？
- 妊娠中に風疹に感染した疑いのある人
- CRS, CRIのお子さんのいる家族

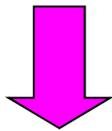
# アプローチの基盤となる 社会への幅広い情報頒布

- マスコミの活用(メディアセミナー、定期的な調査発表等)→厚労省、日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会等々
- 厚労省、都道府県のホームページ等での呼びかけ
- キャンペーン例～「予防医療」
- キャンペーン例～「東京五輪までに制圧？」

科学



政策決定



政策伝達  
(普及啓発を含む)

合理的かつ費用  
対効果の高い対  
策が必要